



日本歳時記卷之二

正月之中

十四日 門松海連繩と云今日思藝代歌よ大なる繩と
教人おつてひくわくそひ引るありこれと松
引と云ふくくく事なり

梅守くくく案時記よくく立春日梅鉤之歌い後
儀總相置絳巨敷墨鳴敷牽之松云輪子遊整
る載舟之歌退物之進則強之く日物強遊
強為歌起強これ強引とお似く事あり
○と松翁翁くく日作判合いんくの西のりて

折券まつるの幕をさそく人のをもとに折券のたて
るときの出入りへくる事とあるべし
てそれ折券の未だぬきぬきのものなり
折券は一人の事とあるより多し
先よりけしひのへあつては國の
くくは國のたつとす
○福國より日清書より
しらとす
くめんとす
ふの事
ふの事

礼教の書はくはせむらふの志

梅すくもろくし
けく書
し
又
掃
め
そ

十五日今日とよ元とよ先
松屋連繩等と信

手紙

くは雨をきやけは火災の變あり爆煙の火より
回振りやうまの連年を多し一かしの家連る
不又ハ電せまぐハ電のトは燒へ一風騒かたに
つねの煙も又可なり 爆煙ハ竹とたえ
とらまはし事あり
我園の今日爆竹すうま 完徳あり一これに
しり初より一車もあろう一よい元日意
一爆竹すまのハ臘魚と焼くし一車果
め化よりえり一又際私をとりくあへきれハ
引難くはゆきも爆竹を布一染深と燃す
上元ハ漢の武帝ハ大とあつた感あり

夜たわろまておあふと車り始して
焼のる何り又西月を松庭燈とぼくし一車
用元車りより一り天竺のハ西月中香信流
あつまりて焼と一 仏舍利とんるあり
爆竹りりり日なりきたちもハ信使一
ハハ信よりハ後漢代明帝の時初き一
もろくハ佛法よりハおまの道士と書使
むと燃る小より一りハとんて佛
とたのちる然しハ書と存小ハ信くゆと
道士の書燒より一りハ信ハたハ義也一といて

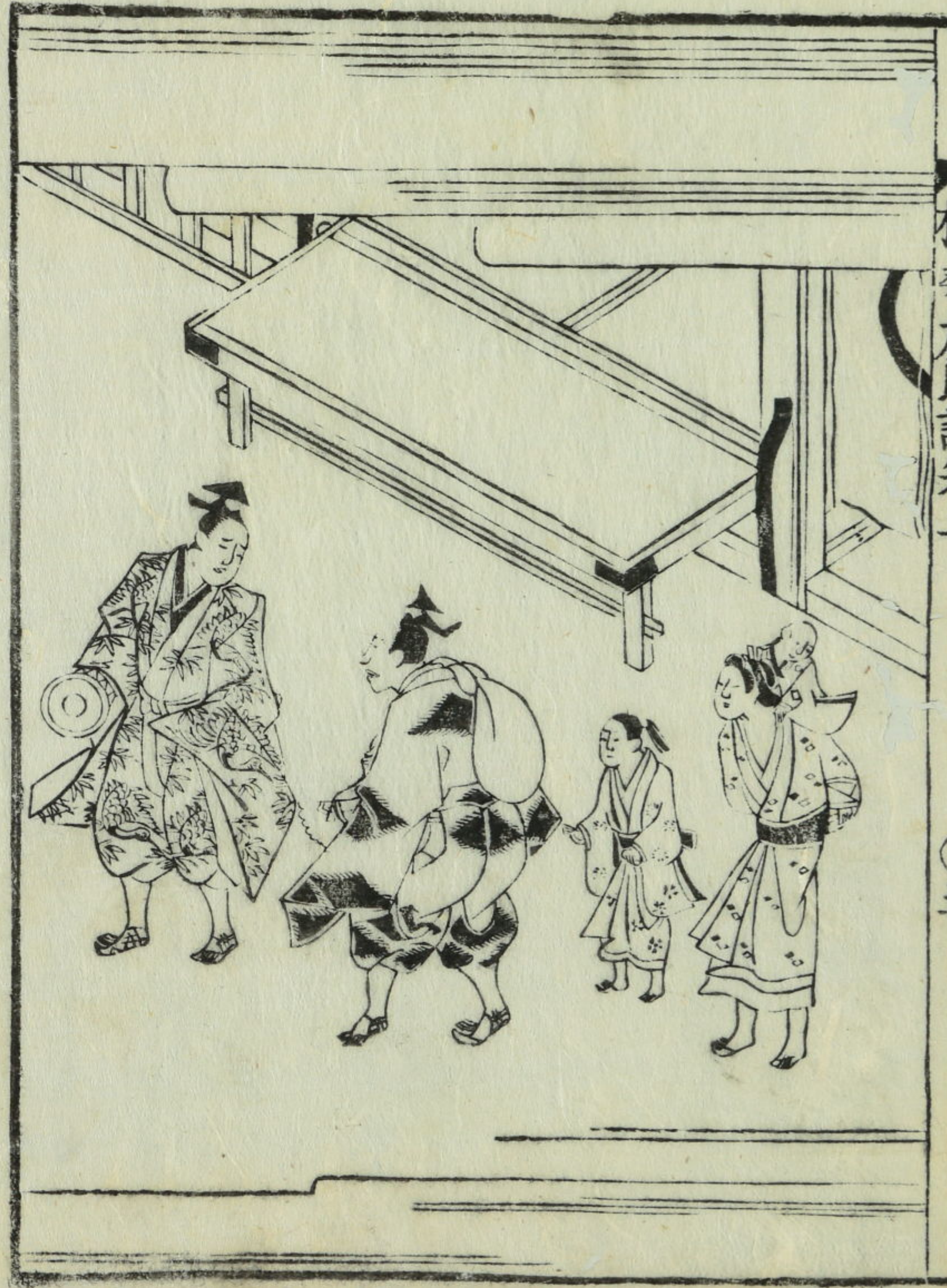
巨義をくも又冠城義もや新也とくわす
多都乃信上爆行と 冠城作は義まよりて新也
較王と云々 海布すくしきりありまてしきハ沙門ハクも
 ときり事なまは秘送と登るるなり
抄の 去るはばまざるは説を授くと新また子又陰陽
 あり後入るを且標集と御依の感徳ありて
 三爰杖燒奇香の三嘉退治れりなりなり
時 時乃の蓋蓋内体ノ入る信はこれ又新也乃
 候るは蓋位するはたしんや候りなり
 隆和元日なるは爆行とくもりありとすまひく

我 國ノハ今日すくもく 甚乃始をま二年
 ノ新氣とくくひ教せるさるるくく 甚乃信
 十二月廿五日爆行とくもり 甚乃始をま二年
 信ははあから隆和元日ノのまらなりはくも
 わるはくく 元爆行の考ハ隆和元日ノのまらなりはくも
 と教敷く 隆和と考く 甚乃信
 まく 甚乃信 中有人也 甚乃信 人即信
 熱名曰 隆和人 甚乃信 隆和 有 甚乃信
 隆又 甚乃信 教 人ノ 甚乃信 孝
 其のありて 隆和 甚乃信 隆和 甚乃信

のりすよん乃く先よ新小憐身とるあふ若
くれくせざんハ舞食おくる所流流人
ありく爆杖と致くろれ所依の樹と焚気
より逆よ綴くやも世朱よりつく是他相死
氣味致杖爆杖致致了又焦氏智業よ家敗
後出集と引てつく爆作妖氣と辟事佐死
たり都人上仲受とよものあり改鬼のあよ
崇となきして分痛と解くもの何さひひ鬼
志死りよ死をと扱く物とよ改受巫要と
取くこれとめりまハおく妖業となひと

いよくけうんあり敗これハ憐くつく日夜
中よおわく深おれく爆作すゆり致中
筆せよ受るれとと致りて爆作して
致よん家これハ妖業ハ事ヤもく也
あんこの致致といく刃まハ爆作ハ邪業と
辟くもり長理あり志わく

○今釣小豆粥と考て鑑とま一てこれと合
流の細く枕まよよ十日いりらつめれせくま
ふとけけいし事なり寛平の比より初り
とら又七粒代粥といハ粒粟赤子糠子



胡麻子小豆也。延壽或云是也。又九修代右也。
おれ代は白敷まめあつて粟粟柿さけをど
かりしとるせり。正月は地葉粥防風粥紫菀粥
をどとくく人よふあり。まといし事。午金月
令よこえり。

世風代正月十五日小豆粥と煮く五穀粥と
なり。庭中葉と煮く杖入粥とるま
その粥凝時赤ふじりい毎夜お粥して毛
とぬきまの夜平なり。しりば外総夜造
祀割敷叔り吳苑をどよさぬくり。はははとれ

好代代後行して修すり。たす玉燭字無
一。正月十五日膏粥とほりて。口ととる
ととるせり。又煎葉粥時記も正月十五日豆
糜とほりて。油膏とるの久くく之のた
中つくと見えり。月令も玉燭とる
ふといし事。はははとる。はははとる。

○今日粗考。代の薬酒は薬酒とて。新果
とす。ひへ。毎月毎日。小豆の汁。かき
ごと。と。極小の書。文。おれ。小。と。せり。
○枕。あ。み。よ。と。く。す。め。日。小。か。め。の。本。は。代。か。じ。て

家れこそら女身をみうごをうかたどく
 してはねまうしるつらひ志つらう
 ねうまふいごうきてるまあうらうら
 いうけうありしうらまひたるも
 一と又被衣束同巻よしく年もか
 中あひあひみそんくあかこよむれ
 ねりきまの粥杖引くつこまよう
 まうごめまうしうらうらまひ
 こしあのかううあしき色の中
 粥乃杖まう打を車可難勢中あ
 粥杖

少く女房としてハ男子とまは
 粥前などいしうらうらまひ
 まうごめまうしうらうらまひ
 粥乃杖まう打を車可難勢中あ
 粥杖

せうりもろいも父兄の心可憐ごとくと
あやまひへんか

○今秋ハ一年十二夜ハ圓月ハ始まりあり
し何れん人かと曾れ月ハ秋ハ事なりや
東坡の妻玉夫人 汝海堂あり 喜ね月と
りて何れん春月ハ秋ハ月ハ秋ハ月ハ
今人懐懐喜月色今人懐懐といひ事
趙使麟の候録録よりいりあ載集より上
門院無師

花れつろよひる中りるふ喜ハ秋のこが

月を月々くうきり 新古今集よ大に千里

てりも世のくものもいふて喜ね秋のゆかり
月夜ふきくものるまよ

○今夕史冊の交ととり事と忘れ之喜命と換
すし月念廣義よりいり

十六日國信は日遊樂と事とす

み報ねよ有魯ハ人多く四月十六日とつ
新報小あふふこれと喜ね秋といふとゆりぬ
もスろくもい日遊樂と事とすあつるや
○又今日喜ねあつる奴婢ハ宿居

とく主人は一日の始と乞て家より父母兄弟
親戚は皆す

梅とふよあはれに執金吾の妻中へ志の
おのつと誓すの事と母の友なり四月十
五日朝志とあはれ一日誓とゆくらこれ
と放夜とすをゆりぬしこの圖もかれ
事ゆりといふなり

廿日今日女人の鏡巻の祓とてうきと休ありし
後徳と誓ふ事ありこれ我生れ徳の徳と
いふとひひと事ありぬらとらぬあは

たつといふと初教後と徳ありふゆこれ
と綴よとさるる一徳よといふなり

晦日 沐浴

○凡そ家入功さへ一と誓ひ時と家内宅中
とあはれを掃除するりもあはれこれ毎月
晦日の家内宅中あはれを掃除ぬれん
来月中掃除をほまたわすけて人功とさる
たれつとすあはれなりと毎月晦日は
乃伊予として美中と掃除せむといふ
延喜式小入なり

○新楚楽時化小元
 月晦小元
 勝と他日聚つゝ飲食次士女舟とくく之類水
 小のぞんで宴樂す毎月之れ弦を鳴朝あり
 西月が初年たりとていつて時俗おも人ト亭
 々々新とひとつり今乃世民及も年始も親
 戚宴會とくとと遊藝とつもかたけ綴々也これ
 び月世人切やく親戚と宴會す
時代後敷の所俗毎元日以後時々松園いじく依處して
 節と習と習して俗をいひも人とし我園れ能會のらる
 たりや
 古くも初と男女とては親戚乃也小
 元は往來して會遊也此び月世と宴會也

多して物多しく遊日と遊多きとありて
 俗と遊と時時と所小節一又世人月多の飲食
 了解飽志く宴會を以て新く願ふ事とす
 去れハ二月天氣和暖乃時多節花開時小
 庭く親戚と宴會す一世人乃宴會と後樂
 とをいふなり古く花樹宴會の時も二三月花
 開時をく一世人宴會なり年宴外家花樹
 乃時一

今年花似去年好去年人
 今年老始知人
 老不始知可惜
 去年好去年人
 今年老始知人
 老不始知可惜

一箇列御史尚書御朔回祀恒會宮花撰

玉紅春酒考

去うれども親戚すくなき人親ハ女子兄弟を以
て親密なるを以て之故情よゆと一

げ月元日より晦日と稱すく世俗小歳酒也
祭り事乃ハ曆林風俗ノ元陰陽ノ事と題
酒よあをよと一ハ有小歳酒ハ方ハ一
乃玉酒乃方なり味十干ノ酒あり但十干此
題ハと酒酒十干甲酉戌庚壬これなり
酒とハ乙丁己辛癸ニ五なり甲ノ酒酒を
酒とハ乙丁己辛癸ニ五なり甲ノ酒酒を

宮甲乃方に其酒の衆酒を南宮酒乃方
在戌の歳酒を中宮戌乃方あり庚の衆酒
を南宮庚乃方あり壬の衆酒ハ北宮壬乃
方小ありハ北宮干其衆酒ハ南宮酒ハ北宮
其乃方あり又乙乃衆酒ハ北宮庚乃方あり
丁乃衆酒ハ北宮壬乃方あり己其衆酒ハ
北宮甲乃方小あり其の衆酒ハ南宮西乃方
あり又其衆酒ハ中宮戌乃方小あり乙丁己
癸其衆酒ハ北宮壬乃方あり其酒ハ北宮
乙配合して酒となすことと云く己と甲の妻

日月の姿とてなりあり揚とる又月紀大なる物
 以て愛崇祀日月星辰を義云々然れは壇皇月於
 壇揚氏云春分朝日始分夕月此皇日月之正
 統也賈誼保傅傳云二代之礼天子喜朝日秋
 暮夕月鄭氏云祭日也壇皇月西壇顔氏云朝
 日以朝夕月以暮法迎其初出也日月を祀事於社氏
 也其文節通考より
 これを天武天皇の日月の姿とてなりあり又
 朝之人皇六十二代漢高天皇乃神代天皇志の
 以新小なりとて神代の祀者日大明神より子也
 代乃後世皇也といふ神代より神代命ありとて皇代乃

事とて言ふが如く皇代とてなりあり又神代とて言ふ日
 とちとて言ふは神代より日待月待乃事なりとて言
 へ今乃世俗士庶人より言ふ事とて言ふは神代
 とて言ふは神代とて言ふは神代とて言ふは神代
 の事とて言ふは神代とて言ふは神代とて言ふは神代
 て日月とて言ふは神代とて言ふは神代とて言ふは神代
 事なり何事なりこれ又言ふ人やむじし皇の大
 事なり神代より神代とて言ふは神代とて言ふは神代
 事なりとて言ふは神代とて言ふは神代とて言ふは神代
 事なりとて言ふは神代とて言ふは神代とて言ふは神代
 事なりとて言ふは神代とて言ふは神代とて言ふは神代

とんや日月と御歳なりあまはまはまや御歳の日と
とめ日月をあまのりかろしめ御歳とあらと
あや神の御歳とうけ給はまらる御歳とあら
あまの御歳とあまの御歳とすつ御歳の日と
とあまの御歳とあまの御歳とすつ御歳の日と
あまの御歳とあまの御歳とすつ御歳の日と
あまの御歳とあまの御歳とすつ御歳の日と
あまの御歳とあまの御歳とすつ御歳の日と
あまの御歳とあまの御歳とすつ御歳の日と

あまの御歳とあまの御歳とすつ御歳の日と
あまの御歳とあまの御歳とすつ御歳の日と
あまの御歳とあまの御歳とすつ御歳の日と
あまの御歳とあまの御歳とすつ御歳の日と
あまの御歳とあまの御歳とすつ御歳の日と
あまの御歳とあまの御歳とすつ御歳の日と
あまの御歳とあまの御歳とすつ御歳の日と
あまの御歳とあまの御歳とすつ御歳の日と
あまの御歳とあまの御歳とすつ御歳の日と
あまの御歳とあまの御歳とすつ御歳の日と

ねのりの世よあつて喜あつたよーのねのり
 具とろろの(邪信と信と)の次天子にあつて
 去る日月と去る車のおろろの(道)の
 元世終世とたのび人を種をくして世の
 福ありとんや(去る)日月と(去る)家と
 とや(去る)日月と久しき去る人とたつふ家と
 世(去る)もあつて(去る)もあつて(去る)もあつて
 及(去る)世の明のちやあつて(去る)世の明のち
 一(去る)世の明のちやあつて(去る)世の明のち
 の(去る)世の明のちやあつて(去る)世の明のち

乃(去る)世の明のちやあつて(去る)世の明のち
 又(去る)世の明のちやあつて(去る)世の明のち
 と(去る)世の明のちやあつて(去る)世の明のち
 て(去る)世の明のちやあつて(去る)世の明のち
 何(去る)世の明のちやあつて(去る)世の明のち
 彼(去る)世の明のちやあつて(去る)世の明のち
 と(去る)世の明のちやあつて(去る)世の明のち
 の(去る)世の明のちやあつて(去る)世の明のち
 あ(去る)世の明のちやあつて(去る)世の明のち
 の(去る)世の明のちやあつて(去る)世の明のち

乃七事といふ又かの七事ありこれ神皇正統記
 いふところひびくありけり名とぶふりすと忌
 たりりまきと神とてとある事かたけり
 去るより今日結月終りて日神月神とまはり
 なるふ信と傳へ終成りありせまじりて神の
 けりてありあれどりあるふすりてありて
 去りたり去るぬるれつとぬるけりえはりあり人
 を習とてあせざりともそのあやまりはあつて人
 多し天孫神皇のそとにありて傳へるのせめ
 たりきまじりてとてかゝる事終りりてありぬ

むす代よりむすひとならる事必終りて世の人
 これ理とありてまはるる事必終りて世の人
 ことくはこれいさう妖巫贗信なりとてにあり
 るひて是より神とてありありありて天孫神皇の
 たりとてとてありてありてありてありてありて
 ありてありてありてありてありてありてありて
 又世傳より唐申傳りてとてありてありてありて
 のことありてありてありてありてありてありて
 りありてありてありてありてありてありてありて
 凡唐申のひびくありてありてありてありてありて

新皇の三戸あはれびこさび廣申とちんがこ
戸伏す又大年廣延よもく勢を三屍代姓
常より人牙の中あわさるるを飛とうりひ
一廣申の目又死りては上帝の御あり
他とまよふまのまが三屍と繼ぐ一かくれとく
存まばとれたら神代始へ一志と感徳御
いそくこ戸の神とまく人り代りの中あり
人乃善悪とよく考へて廣申の目と
三屍代聖のわまのいふ代天曹の氣に上りて此
人ちうくりむとたの御事とわたりひこり

小ばぐされ人乃あまらたなれば死より一紀
十二年乃壽命とうりひ少くも一算六十年
乃命とうらふあまの御事と神がまの御事
てこれをさけよとありかたはる御事
んが御事らまたんや御事れあまの御事
何り御事不義乃家小の御事あるを聖人乃
さく御事の御事と志らまよ御事と有りて
廣申の取柄とまてありぬまの御事と
まぬらうとまの人は御事とまの御事
おれづ御事とまて御事とあまの御事

おてあまきう程りと志くぶらうやんや庚
申とちしりの夢乃義よあさすけ花梅
らひして諺明よてふとふ今世の悟これと
ちうど機念とすうそ庚申と夢のと機を
あやまのり上げ何屋よりあるべし又器邦
あま庚申ハ機回差大邪乃可る給ふ日あま
中代大邪とちうのりいふも信をてこれ又
附念の信あり又庚申念あり申も念あり
念と念と朝する日あまつしむべふ日あり
しあま中お土と入ておまはれ夢ととらとあり

先又夢記あり己約のお刺とつら庚と申
あまのやうにたふ己の機よ理あて事あま
あまのゆるた流儀よまらうにね終妹あ乃
るりとちうさび志く可なりされハ柳子屋三戸
と罵文あり吾謝頼三歌傳何り冠京論柳
り文に誠とら何り又傳史略よ庚申乃春を
慶生れ邪法何て親氏をけりて心と志のせり
海原とらうこれ妹あて事と知くかくとらま
解波探傳よみあうてと謝頼り傳よりて傳
あま又げ物何りしとていふの機又美に堪り

傳記 庚申記 二二二

評語の初に家宣初共守唐申と云ふに
と云強弱の用兵代侍一唯教推甲子不後
唐申と云ふ事

世保西又九月と云ひ三月と拘忌申と云ふ事
中身もめつたてくあると云ふ事又新紀に
西又九石上友唐より築は已あり清波新志
小つて佛法は此の凡為齊素月不宣寧新
是破信人今系師官命下外任初不忌此凡
而差殊又外友也不也之若る初敗又如何
不忌之甚也云々又那那代評語と云ふ西又

九月石上友戴姓の事新氏乃多備の天帝
新家後と云ふ事大社別と云ふ事毎月一
梅して人の善悪を考す此三月有晴那別と
て一人一人これと云ふ別刑と云ふ事曰三長
月新法因く唐率といふ事石上友流世因
之と云ふ事と云ふ事金ハ唐唐氏乃初より
儒教の法はこれと云ふ事と云ふ事及云世人
をさすげ拘忌と云ふ事と云ふ事可云あり
と云ふ事と云ふ事月は隆尨乃像と云ふ事思と云
七月今唐義に及云事我因も隆尨の事

世亦久しむる所也とありゆりて終つてつる
 色相する志何りゆきい磨造史より紐付
 年中 鐘道といふその料率亦無せり及第
 せざる事と取し遊し終て死す事此れ何
 たるに袍帯を飾りて葬せしむる明皇
 或年の四月元日の夜に夢みゆりて小鬼
 りり虚耗と稱して玉笛とぬきむ時よ一たび
 て小鬼とて入てこれと夢み明皇を
 こまぐらんと呼ぶに對しこまぐら終つて
 金に鐘道ありりきありては袍帯の葬と

飾りたる紙衣は世と報せんがみよ誓て天下
 耗り思と降くしり終ひて身よと死せしめら
 是處より命よりこれ像と圖してこれと
 此之らよりとせんまきとのむりたりわ
 ちうまに強進強欲御物鐘道表あまの冊
 より教院よひ事ありて久し振るる小鐘
 抄志よひて鐘道磨乃明皇代教より誓り
 けしあつる物あり如史よ老體中りか
 を降邪干渉言ひ鐘道宋代家熱り嫌の
 鐘道たが誓と鐘と誓同して言ふありり

阿そひ羅一遊とまらび理明らるるふとの
けりくろたきあしとまらる

げ月樹木と樹敷へ一四月と木とゆゆの

史古書より見えてり樹と切く地は挿しは月

り一又記茶と樹敷をい月より一と月令

廣義より見えてり一これより樹敷の氣とゆき樹

生滋よりあるや樹敷をい一とく元徳草木

と樹ふふ一樹の滋上樹の茶より

八日と地帯の八月と樹敷をい一樹とて樹一

氣盤をい樹木の生帯をい一樹をい一りある

下弦の廿三日
と上弦とい

後世はも樹とやう樹木といばも木とやう

又いらく元果木とゆゆの先九月の仲秋後

樹はまらると樹と繩といきまらるとかきをり

よりありあ肥土と入水と渡へ一次年正月

らう一らゆ一樹敷の時土と中分をい樹と

おとつとあしとく一とよやうの土と加え

地而より二三寸たたくとよ一土とたきふた

く一とく一樹敷ののら中月や一毎の水と渡へ

水月柳の枝と切て地は挿し速く樹敷ととも月令廣

義より見えてり元月枝と挿し可あり木の枝

楓松根固相 經歴松海紅海棠山葉花石楠
 山慈薺薔薇花梅檜等あり 其諸樹と日
 めか細葉一砂土と等分にしてあひて
 よくまへちせすむる地よきまづあひて
 枝をる年のごころよりき節のあはれき方々
 えごみく先元とてしるその元なき
 たる枝とてあすごとくあはれき方々を
 海地より一或はよきあひて一日とて
 ありのりたれごとくあはれき方々
 秋よりて根をたる時移してあひて又物

冬よ茂繁せざる木は月梅及び時挿て
 竹そ葉茂る木を西月挿へ一凡そ木
 うるまいたるやきも一秋葉利用し
 数より十年の形を樹と挿へあはれき
 といつて凡そ木と樹を函とてあ一日
 中よ越んでる代を程と挿へ一その
 葉とあはれ下して凡そ木の葉を
 生息最可親といひ秋葉親法
 無與人同くといふ物味
 て玉塊生妙の仁とて

歐陽文の種記詩よ

激激紅白宜和間一歩後仍源流兼載我欲河成
播酒去等教一日不從用

楊波蘇の二の種ハ詩よ

二区初開是特種再開二区有剛明謙奇奄
二二連一區花開一區

趙何の種仁杏詩よ

白紫梅根総送運何年及見子垂老未但欲
深塔植石同園花結子時

四月を教生代種あり在よ未とらんりある是なる

果とらんりあるはありあるはありあるはあり

むもれらん相ひをらん秋乃ををあるはあり

以事願念よ力えらん部別のつく樹木以何世寫

念秋以時報言弘子の日秋一樹殺一果不其

時收者也これ聖義よあり未とらんり秋とらん

とふ時とらんり未とらんり未とらんり未とらん

天也らんり未とらんり未とらんり未とらん

漸細よらんり未とらんり未とらんり未とらん

お小固密して未とらんり未とらんり未とらん

げ月程同とらんり未とらんり未とらんり未とらん

本草 卷之六 樹木 一 杏 一

生葱とくくいの面よ遮風と起すの又梨とくくふ
くまうれ又櫻餅不州此物と考へて飛騨
乃氣と遊へ
月令度義書表
叢書

凡一年よ七中二候有り又月と一候と一候と一
氣と一候と一月と一七中二候と一年よ
四月より十二月まで毎月各七候と考へて先
四月乃六候第一候風細凍才之登 齋始振才
三氣と一候右三候乃三候才一才四候と考へて
又海風才六候本筋初左面水乃三候才
凡一日一候漏刻乃三候と考へて百刻ハ漏水の

内よ三と一乃考へて二と一と考へて一と一と考へて
長に考へて一と一と考へて一と一と考へて
考へて一と一と考へて一と一と考へて
一と一と考へて一と一と考へて一と一と考へて
先三と一と考へて一と一と考へて一と一と考へて
十分合百刻あり而水ハ五箇中六刻五分
辰五中四刻十分あり凡六十分と一刻五分
月令度義
書表



